

ごん狐

新美南吉

一

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、私たちの村の近くの、中山というところに小さなお城があって、中山様というお殿様が、おられたそうです。

その中山から、少し離れた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだのいっばい茂った森の中に穴を掘ってすんでいます。そして、夜でも昼でも辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもを掘り散らしたり、菜種がらの干してあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしり取って、いたり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨が降り続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨が上ると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、もずの声がきんきん、響いていました。

ごんは、村の小川の堤まで出てきました。辺りの、すすきの穂には、まだ雨の滴が光っていました。川はいつも水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どっと増えています。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄色く濁った水に横倒しになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩き寄って、そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だな。」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、腰のところまで水に浸りながら、魚をとる、はりきりという、網を揺すぶっていました。鉢巻きをした顔の横っちょように、円い萩の葉が一枚、大きなほころみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網のいちばん後ろの、袋のようになったところを、水の中から持ち上げました。その中には、芝の根や、草の葉や、腐った木ぎれなどが、ごちゃごちゃ入っていました。でもどこどころ、白いものがきらきら光っています。それは、太い、なぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一緒にごち込みました。そしてまた、袋の口を縛って、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくを持って川から上がりびくを土手に置いといて、何を探しか、川上の方へ駆けていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、びよいと草の中から飛び出して、びくのそばへ駆けつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網の掛かっているところより下手の川の中を目がけて、ぼんぼん投げ込みました。どの魚も、「とぼん。」と音をたてながら、濁った水の中へ潜り込みました。

6 【した】シダ植物の総称。日陰に生え、花は咲かず、胞子で増える。

7 【菜種がら】菜種油を絞ったかすのこと。

8 【百姓家】農民の住む家。農家。

8 【とんがらし】とうがらし。

12 【もず】モズ科の鳥。全長約二〇センチメートルで、くちばしが曲がり、尾が長い。

1 【堤】川や池などの水があふれないように、土や石を岸に高く積んだもの。

3 【萩】山野に生える落葉低木。「萩の七草」の一つ。

8 【はりきり】はりきり網。普通は「待ち網」というが、大雨で池から出てくるうなぎを、その下で川幅いっばいに網を張って捕まえることからこのようにいう。

11 【芝】イネ科の多年草。

13 【きす】キス科の魚。

13 【びく】釣り上げた魚を入れておく籠。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬると滑り抜けるので、手ではつかめません。ごんはじれなくなった、頭をびくの中に突っ込んで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッと行って、ごんの首へ巻きつきました。そのとたんに兵十が、向こうから、

「うわあぬすと狐め。」と、どなりたてました。ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎを振り捨てて逃げようとしたが、うなぎは、ごんの首に巻きついたまま離れません。ごんはそのまま横つとびに飛び出して一生懸命に、逃げていきました。

洞穴の近くの、はんの木の下で振り返ってみましたが、兵十は追っかけてはきませんでした。ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみ砕き、やっと外して穴の外の、草の葉の上に載せておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかると、その、いちじくの木の下で、弥助の家内が、お齒黒をつけていました。鍛冶屋の新兵衛の家を通ると、新兵衛の家内が、髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。

「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それにだいいち、お宮にのぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやってきますと、いつのまにか、表に赤い井戸のある、兵十の家の

前へ来ました。その小さな、壊れかけた家の中には、おおぜいの人が集まっていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭いを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えています。

「ああ、葬式だ。」と、ごんは思いました。

「兵十の家の誰が死んだんだろう。」

お昼が過ぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんの陰に隠れていました。いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、彼岸花が、赤いきれのように咲き続けていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、彼岸花が、踏み折られていました。

ごんは伸び上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、位牌をささげています。いつもは赤いさつまいもみたいな元気の良い顔が、今日はなんだかしおれていました。

「はん、死んだのは兵十のお母だ。」

ごんはそう思いながら、頭を引っこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のお母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網を持ち出したんだ。ところが、わしがいたはずらをして、うなぎをとってきてしまった。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままお母は、死

8 【はんの木】カバノキ科の落葉高木。

13 【家内】妻。

13 【お齒黒】歯を黒く染めること。

13 【鍛冶屋】鉄を熱して打ち、刃物や農具などを作る人や店。

14 【髪をすく】髪の毛をくしとくす。

18 【赤い井戸】土管を用いた井戸で、素焼きに近く、赤っぽい色をしている。

6 【六地藏さん】六体並んだ地藏菩薩のこと。

7 【彼岸花】田のあぜ道や土手などに生える多年草。秋の彼岸の時期に鮮やかな赤い花が咲く。

13 【白いかみしも】葬式の際に着る白い着物。

13 【位牌】故人の法名（＝仏の弟子になったという意味で故人につける名前）などを書いた木の札。

んじやったにちがない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

三

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と二人きりで貧しい暮らしをしていたもので、おっ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「俺と同じ一人ぼっちの兵十か。」

こちらの物置きの後ろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置きのそばを離れて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。「いわしの安売りだあい。いきのいいいわしだあい。」

ごんは、その、威勢のいい声のする方へ走っていきました。と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわし売りは、いわしの籠を積んだ車を、道端に置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へ持って入りました。ごんはその隙間に、籠の中から、五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へ駆け出しました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げ込んで、穴へ向かって駆け戻りました。途中の坂の上で振り返ってみますと、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎの償いに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗をどっさり拾って、それを抱えて、兵十の家へ行きました。裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには兵十のほったに、かすり傷がついています。どうしたんだろと、ごんが思っていますと、兵十が独り言を言いました。

「いったい誰が、いわしなんかを俺の家へ放り込んでいったんだろ。おかげで俺は、盗人と思われて、いわし屋のやつに、ひどいめに遭わされた。」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶん殴られて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこう思いながら、そっと物置きの方へ回ってその入り口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十の家へ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、松たけも二、三本持っていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を歩いて少し行くと、細い道の向こうから、誰か来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側に隠れて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助というお百姓でした。

「そっそう、なあ加助」と、兵十が言いました。

15 「松虫」マツムシ科の昆虫。秋に鳴く代表的な虫。

「ああん？」

「俺あ、この頃、とても、不思議なことがあるんだ。」

「何が？」

「おっ母が死んでからは、誰だか知らんが、俺に栗や松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、誰が？」

「それがわからんのだよ。俺の知らんうちに、置いていくんだ。」

「ごんは、二人のあとをつけていきました。」

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

それなり、二人は黙って歩いていきました。

加助がひよいと、後ろを見ました。ごんはびくっとして、小さくなって立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさと歩きました。吉兵衛というお百姓の家まで来ると、二人はそこへ入っていきました。ポンポンポンと木魚の音がしています。窓の障子に明かりがさして、大きな坊主頭が映って動いていました。ごんは、

「お念仏があるんだな。」と思いつながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れだって吉兵衛の家へ入っていきました。お経を読む声が聞こえてきました。

五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助はまた一緒に帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十の影法師を踏み行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「俺は、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、神様が、おまえがたった一人になったのを哀れに思わっしやって、いろんなものを恵んでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。俺が、栗や松たけを持って行ってやるのに、その俺にはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、俺は、引き合わないなあ。

六

その明るる日もごんは、栗を持って、兵十の家へ出かけました。兵十は物置きで縄をなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と狐が家の中へ入ったではありませんか。こない

14 【木魚】僧がお経を読む際に、たたいて鳴らす木製の道具。

16 【お念仏】仏の名を唱えること。特に「阿彌陀仏」の名を唱えること。

8 【思わっしやって】お思いになって。

15 【なう】わらなどを一本により合わせる。

だうなぎを盗みやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は、立ち上がって、納屋に掛けてある火縄銃を取って、火薬をつめました。

そして足音を忍ばせて近寄って、今戸口を出ようとすると、ドンと、撃ちました。ごんは、あたりと倒れました。兵十は駆け寄ってきました。家の中を見ると、土間に栗が、固めて置いてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、おまいだったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火縄銃をばたりと、取り落とししました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。

〈出典 『名作童話 新美南吉 30選』 (春陽堂書店、二〇〇九年)〉

【著者】新美南吉 (にいみなんきち)

一九二三 (大正二) 年—一九四三 (昭和一八) 年

児童文学作家。愛知県の生まれ。

【著書】『手袋を買いに』『てんでんむしのかなしみ』『おじいさんのランプ』など

3 【納屋】農家などの物置き小屋。

3 【火縄銃】縄の先につけた火で火薬に点火して弾を発射する鉄砲。

8 【おまい】おまえ。